

# 多職種によるチーム医療と 実践する「場」の提供で 充実した食事療法・運動療法を提供

独自の運営で生活習慣病対策に取り組みむクリニック

CASE STUDY

## 医療法人社団 美田内科循環器科 クリニック (札幌市手稲区)

— 高血圧性疾患906.7万人、糖尿病

270万人、心疾患(高血圧性のものを除く)

161.2万人、脳血管疾患123.5万人—。

これは厚生労働省の「2011年患者調査」における推計患者数ですが、近年は入院患者が減少する中で、高齢者を中

心とした生活習慣病の外来患者が増えていると言われています。外来医療の中心を担う地域のかかりつけ医には、生活習慣病の治療だけではなく、その予防や生活習慣改善のための指導などがいっそう求められてくるでしょう。

札幌市の美田内科循環器科クリニックは、生活習慣病の治療はもちろん、多職種によるチームアプローチや運動施設の併設などの独自の運営により、生活習慣改善や精神面を含めたトータルの健康管理に力を注いでいるクリニックです。



理事長・院長 美田 晃章 先生

### 質の高いチーム医療をめざし スタッフのスキルアップを支援

美田内科循環器科クリニックは、札幌市手稲区で1999年に開院した比較的新しいクリニックです。理事長・院長の美田晃章先生は、勤務医時代は循環器科の専門医として、狭心症や心筋梗塞、腎不全などの治療に携わっていましたが、その中で再発予防と慢性期のフォローの重要性を痛感したことが開院のきっかけになったと話します。開院当初は、自身の専門性を活かした循環器疾患の診療が中心でしたが、糖尿病の合併症として循環器疾患を発症する患者さんが予想以上に多く、糖尿病治療にも力を入れるようになったそうです。現在では1日平均80~100名の外来患者のうち、生活習慣病の患者さんが約8割を占め、さらに約3割は糖尿病の患者さんだと言います。

美田先生は、生活習慣病の療養指導や健康管理などにきめ細かく対応するため、チーム医療の実践を志向してきました。そのため、開院当初から看護師や管理栄養士、薬剤師などの専門職を配置していましたが、最初は

スタッフ個々のスキルもまだ低く、業務の多くが補助的な役割にとどまっていたそうです。「もっと医学的知識を習得し、積極的に患者さんの治療に関わって欲しい」と考えていた美田先生は、院内で勉強会を実施するなどのスタッフ教育を進めていましたが、大きな契機になったのは2001年にCDEJ(日本糖尿病療養指導士)認定制度がスタートしたことでした。

「これは勉強の良い目標になるのではと考え、スタッフに資格取得を奨励しました」と美田先生。目標を示すだけではなく、勉強へのモチベーションが高まるようにと、資格取得にかかる費用をクリニックで負担し、資格を取得したスタッフには手当を支給。これらの支援が大きな後押しとなり、スタッフの勉強意欲が高まるとともに、スキルアップに熱心なスタッフが集まるようになっていきました。患者さんに対しても専門知識に基づいた指導や助言ができるようになり、院内の雰囲気も良くなっていったそうです。「現在、当クリニックにいるCDEJ有資格者は5名ですが、これまで9名の合格者を出しています。また、資格を持たないスタッフの知識も高まっており、全体のレベルアップにつながったと思っています」。

スタッフのレベルが高まるにつれて、院内の勉強会やカンファレンスでも活発な意見が交わされるようになり、患者さんの情報を全員が共有した上で、より適切な指導法や対応法などが議論されるようになりました。

## 電子カルテの導入で 院内連携はさらに強化

開院6年目には、さらなるチーム医療の強化を目指して電子カルテを導入。診察室、処置室、薬局、栄養相談室に端末を配置し、全スタッフがタイムリーに患者さんの情報を共有できるようにしました。たとえば、糖尿病の患者さんが再診受診した場合、血液検査の結果が出るまでの間に看護師が前回からの経過について問診を行います。その情報は、検査値とともにその場で電子カルテに入力され、この段階で食事指導や運動指導の必要性が認められれば、看護師や管理栄養士、健康運動指導士が速やかに連携し、面談・指導の準備が整えられます。「患者さんが診察室に入るときには看護師の問診が終わっていますので、診療が非常にスムーズです。食事や運動については、私が介在しなくても必要な準備を進めてくれるので助かっています」と美田先生。多職種の連携と協働により、それぞれが専門性を十分に発揮するチーム医療の成果が出てきていると考えています。

一方、新規の糖尿病患者さんの場合は、看護師と管理栄養士が自覚症状や既往歴、生活習慣などを、時間をかけて聞き取ることを徹底しています。必要な情報を十分に得た上で、美田先生が診療して治療方針を決定し、スタッフに指示を出していきます。そのほか、薬剤師や管理栄養士が待合室で診察を待っている患者さんに積極的に声を掛け、診察室ではなかなか聞き出せない情報を収集することもあるそうです。



看護師や管理栄養士が、手作りの展示物を使って健康のための啓発を行うコーナー。ここでは「肉祭り」と称し、肉のさまざまな部位ごとに、どれだけの脂質があるかをわかりやすく説明している。

このようなスタッフの積極的な姿勢は待合室にある展示コーナーにも表れています。この展示コーナーは「患者さんのためにできることを考えよう」と、看護師と管理栄養士が協力して作成しているもの。たとえば、清涼飲料水に含まれる糖分を角砂糖の数に換算して表示したり、肉類に含まれる脂質の量をボトルの大きさと表現したりと、患者さんが興味を持ちそうなテーマと表現方法を考えながら、手作りして展示物を作成し、2カ月ごとに更新しています。患者さんからの評判も良く、展示物を見た患者さんからは「こんなにたくさんの砂糖が使われているなんて驚いた」など、生活習慣や食生活を改善するきっかけづくりにも役立っています。

## 専用施設を併設し 生活習慣改善の場を提供

「生活習慣病の患者さんに運動指導や食事指導をしても、きちんと実行してくれる患者さんばかりではありません。そこで指導するだけではなく、一人ひとりに合った運動などを実践できる場所をつくりたかったんです」と語る美田先生。待合室で始めた運動教室の好評を受け、2010年にはクリニックに併設する形で3階建ての「ウェルネス館」を完成させました。3階に設けた「フィットプラス」というシャワールーム付きの健康運動施設には、ヨガマットやゴムボールといった用具をはじめ、トレッドミルなどの本格的な有酸素運動マシンを装備。美田先生の運動処方せんに基づいて、健康運動指導士が患者さん個々の運動プログラムを作成し、個人指導を行っています。また、みんなで楽しく運動が続けられるよう、ヨガや体操など、バラエティに富んだグループエクササイズも用意されています。「ここに来ると仲間がいるので、楽しんで運動されています。患者さん同士でダイエットなどの経験を話し合うことも、運動効果を高める一因になっているようです」。

ウェルネス館にあるのは運動施設だけではありません。2階には150インチスクリーンを備えたコミュニティホールがあり、勉強会や研修会のほか、患者さんや地域住民を対象にした健康教室やミニコンサート、映画上映などにも活用されています。ホールに隣接した調理実習室では、減塩や減カロリーなどのテーマを決めて実際に料理をつくる調理実習や、食事をしながら管理栄養士の講義や指導を受けられる料理教室も開催。さらに1階の



患者さんが運動できるフィットネス施設のほか、勉強会や健康教室、コンサートなどにも活用できるミニホール、さらに栄養指導のための調理施設、患者さんがくつろげるラウンジなどが併設されている。



ラウンジは患者さんがくつろぐスペースとして、また患者さん同士のコミュニケーションのスペースとして自由に使えるよう開放し、喫茶部や売店も併設しています。

このほか、「健康に役立つことなら何でもやろう」と、毎年春のウォーキング交流会や秋にはパークゴルフ大会、年3~4回の「歌声喫茶」などのイベントも開催。中でも「健康フェスタ」は患者さんだけでなく、地域の人にもオープンにしているクリニック最大のイベントです。健康に関する講演や実演に加え、落語やゲームなども織り交ぜながら、地域の人々の健康に対する意識向上も図っています。

## 介護施設や病院との連携強化で 高齢者や認知症患者さんに対応

現在、同クリニックでは、看護師4名、薬剤師3名、薬剤助手1名、臨床検査技師1名、管理栄養士1名、健康運動指導士3名、事務5名、売店喫茶スタッフ1名が勤務しています。もちろん、人件費を含めたコストは一般的なクリニックよりもかかりますが、診療報酬で算定できるのは栄養食事指導料など一部であり、単純な収支面だけで考えると多くはクリニックの持ち出しになります。

しかし、美田先生は「専門スタッフがいて細やかな指導をしてくれるし、ここに来れば仲間がいるので、運動が習慣になりやすい、という患者さんも多くいらっしゃいます。そうやってクリニックとの信頼関係が生まれれば、ご家族の健康管理や定期的な健診、合併症のスクリー

ニング検査なども任せてもらえるようになります。また、最近は口コミで来院する患者さんも増えていますので、目先の収支だけで判断しないようにしています」と長いスパンでの費用対効果を考えているようです。

今後の課題は、ますます増えていく高齢者への対応です。最近は糖尿病と認知症を併発している高齢者も多く、地域の介護施設や地域包括支援センター、訪問看護ステーションなどとの連携が重要になってきました。このような地域のニーズを目の当たりにして、看護師主任が自発的にケアマネジャーの資格を取得。介護保険制度や介護事業者側の立場を理解できるようになり、以前よりも介護関係者との連携がスムーズになったと言います。「ケアマネの資格取得は私が指示したわけではなく、自分で必要だと考えて勉強してくれたことに心強さを感じています」。

このほか、院内処方であり、薬剤師が3名いる強みを活かし、高齢者や認知症の在宅患者さんへの服薬指導にも対応していく考えです。というのも、最近は認知症などにより、「薬の飲み方がわからなくなった」と電話をかけてくる高齢者が増えており、連絡を受けて患者さん宅を訪問するケースもたびたびあるからです。「こういった需要は今後ますます増えるものと考えられますので、訪問服薬指導などにも力を入れていく考えです。将来的には在宅での栄養指導もしたいのですが、現在は管理栄養士が1名しかいませんので、こちらはニーズを見ながら増員も視野に入れていきます」。

患者さんのためにできることは何でもやってみる。同クリニックの変わらない姿勢は、院内の活動だけではなく、院外の活動や地域連携にまで広がっているようです。



施設DATA

医療法人社団  
美田内科循環器科クリニック

所在地／札幌市手稲区星置2条4丁目7-43  
TEL／011-685-3300  
理事長・院長／美田 晃章